

とうきょうのフクロウ類は今・1

フクロウ類はいずれも猛禽類で、自然界の食物ピラミッドの頂点に位置する鳥です。そのため数は少なく、その生息は、環境を知るひとつの目安になる動物です。東京を中心として、近隣を含めた“とうきょう”一帯の最近の状況をシリーズで紹介します。その第1回は、激減いじめるしい東京23区での夏鳥・アオバズク。営巣環境の保護のために、その場所は公表できませんが、23区内の某公園で昨年繁殖が確認されました。最近で確実な繁殖例は、1994～2003年にかけて杉並区宮前での様子が報告されている程度です。

アオバズクが東京都区内で2020年に繁殖

2020年に東京都区内の公園で営巣したアオバズクについてご報告します。近隣の人によればここ数年鳴き声を聞いていたそうで、私も2016年夏の夜中に「ホーホー」と鳴くのを聞いていました。今回は経験者のお話を伺いながら、初めてのアオバズクの観察となりました。

5月にはすでに来ていたようですが、姿を目撃したのは6月半ばです。いつもほぼ同じ枝にとまり、向いた方向には車道を挟んでケヤキの大木があり、その12～13mの高さに樹洞がありました。

7月初めに雌の出入りを見た人もいて、営巣が確認出来て皆の期待が深まりました。ツミも一足早く、10メートル程離れたケヤキの大木で営巣していて、7月半ばに雛3羽が巣立ちました。近くで狩りをしているツミがアオバズクの雛を



巣を見張る親鳥(8月9日)



巣立ち雛(8月12日)

襲わないか心配でしたが、アオバズクの親鳥はホンセイインコやオナガやカラス等が洞に近づくと追い払い、しっかりと巣の見張りをしていました。近くの木に登っていたアオダイショウにも飛びかからんばかりの攻撃をしました。

7月末に雌の親鳥が日中も時々洞から出るようになり、7月28日に待望の白い羽毛の雛2羽が見え、その後に3羽の雛がいることがわかりました。

8月に入り雛の白い羽毛は茶色に変わっていき、羽ばたき練習も始まりました。巣の中の木くずのような物を放り出したり、洞口に立って頭を回し、外を窺っている様子に、そろそろ巣立つかと朝晩の観察に気が抜けませんでした。

8月10日の夕方18時55分頃に、一番子が飛び出して、落ちないかと危ぶまれましたが、無事に親鳥の近くにとまりました。

さらに翌日・翌々日に、二番子・三番子も順調に巣立ちました。

その後、連日の36度前後の暑さの中、雛たちは喉を震わせたり、水分を採るためか近くの葉をかじったりして耐えていました。1か月ほど日中は藪で過ごし、薄暗くなるころに親の鳴き声を合図に音もなく飛び立ち、親に捕ってもらった蝉や蛾やトカゲ等を食べていました。次第に自分たちで餌を捕れるようになり、9月8日、飛び交っていた雛3羽がいつもと違う方向へ飛び、戻って来ません。その後には雛の姿は見られず、子供達だけで旅立ったようでした。

親鳥2羽はその後この藪に残り、比較的暖かい日が続く中で滞在し、11月19日に見たのが最後となりました。先に旅立った子供達、目指す越冬地がどうしてわかるのでしょうか。本年もこの営巣出来ると思われるギリギリの環境が維持され、再び訪れてくれる事を祈ります。